「つながる　はじまる　なかの」の実現に向けて

中野区

面積 ……15.59㎢
世帯数 ……207,107世帯
人口 ……332,432人
（うち外国人）……15,484人
予算 ……1,579億円
職員数 ……2,103人

中野駅北口から徒歩3分の区役所本庁舎。（令和6（2024）年度新庁舎に移転予定）

哲学をテーマにした「哲学堂公園」。世界で例のない公園として評価され、平成21（2009）年に東京都指定名勝に選ばれ、さらに令和2（2020）年に国の名勝に選ばれた。

中野駅周辺再開発で誕生した中野四季の都市（まち）。中野四季の森公園を囲むように業務ビルや大学等が立ち並ぶ。

中野区公式シティプロモーションキャラクターの「中野大好きナカノさん」。個性あふれる中野の魅力をＳＮＳで発信しています。

歴史・見所・名所

江戸幕府が開かれると、村々が整備され中野郷は12の村に分けられ、幕府の直轄領と旗本・御家人領となりました。また、青梅街道に中野宿が開かれ、多摩地域からの物資の集積地として栄えました。元禄年間に五代将軍綱吉は「生類憐みの令」を出し、江戸の野犬を収容するための「お囲い」を今の中野駅周辺に作りました。綱吉の死後廃止された「お囲い」の跡地の一部には、八代将軍吉宗が桃を植え「桃園」が作られました。

明治に入り旧村が合併して中野村と野方村が誕生するとともに、甲武鉄道（現在のＪＲ中央線）が開通して、中野駅ができると青梅街道沿いから駅周辺に市街地の中心が移っていきます。さらに関東大震災後に急激な宅地化が始まり、昭和に入り西武新宿線が開通して区北部も発展を始め、昭和7（1932）年には東京市の市域拡張に伴い、中野町と野方町が合併して中野区が誕生し、その後も住宅地として発展してきました。

現在の中野駅周辺は、ポピュラー音楽のホールとして有名な「中野サンプラザ」をはじめ、サブカルチャーの店舗が集積する「中野ブロードウェイ」、多彩な飲食店街により、にぎわいの絶えないまちとなっています。また、中野通りや哲学堂公園が桜の名所として親しまれているほか、中野駅北西の「中野四季の都市（まち）」に「中野四季の森公園」や業務・商業ビル、大学のキャンパスなどが誕生し、新たな中野の魅力を発信しています。

概要

中野区は23区の西部、武蔵野台地の東端にあり、都心に近く交通の便が良く、アパート・マンションなどの賃貸住宅が多い、生活利便性の高い生活都市としての性格を色濃く持っています。

平成24（2012）年以降、人口は増加に転じ、令和2（2020）年には外国人比率が6％近くを占めています。人口密度は23区の中で2番目に高く、世帯の半数以上が単身世帯で、20代・30代の人口比率が高くなっています。

戦前から住宅地として発展してきたため、企業数は少なく、商業・サービス業などの第三次産業が全体の9割近くを占めています。区の中央に位置する中野駅周辺や東部の東中野駅周辺、中野坂上駅周辺などが、企業の集積やたくさんの飲食店でにぎわっている一方、道を1本外れると閑静な住宅地が広がっており、北西部では生産緑地を見ることができます。

中野区は自治基本条例や区民公益活動の推進に関する条例、地域支えあい活動の推進に関する条例の制定など、これまでに培ってきた区民自治の歴史を尊重しつつ、高齢化や少子化対策、スポーツ・健康づくり、まちづくりへの積極的な取組みなど、持続可能な地域社会の実

現のために区民とともに着実な歩みを続けています。

主要課題・将来展望

⑴ 「人と人とがつながり、新たな活力が生み出されるまち」

さまざまな国籍や価値観を持った人々が集まる中野の特性を生かし、人と人とのつながりや地域への関心と参画、自治の営みを広げ、地域への愛着を生み出すまちを目指します。地域コミュニティを支える人材育成と団体支援の充実化、持続可能な地域経済の成長と働き続けられる環境づくり、まちづくりと連携した商店街の活性化などを推進し、持続可能な活力あるまちの実現を図ります。

⑵ 「未来ある子どもの育ちを地域全体で支えるまち」

子どもの権利の尊重と理解促進を図るとともに、子育て・子育ち環境の整備や学校・地域・民間事業者などの連携・協働により、子どもの学びを地域全体で支える環境の整備を推進します。妊娠・出産・子育てトータルケア支援や児童館の機能強化、若者支援事業の推進などに取り組み、すべての子どもの学びと育ちを支えるまちづくりを目指します。

⑶ 「誰もが生涯を通じて安心して自分らしく生きられるまち」

地域のさまざまな主体が一体となって、障害のある方、生活困窮者、生活上の複合的な課題を抱えている人など、誰一人取り残されることのない体制を構築します。多様な交流・つながりを育み、いつまでも活躍できる環境づくり、地域医療体制の充実、権利擁護と虐待防止の推進などを図り、いくつになっても自分らしく生きられるまちを目指します。

⑷ 「安全・安心で住み続けたくなる持続可能なまち」

地区の特性に応じて、あらゆる災害に強く、犯罪や事件・事故がなく、いつまでも住み続けたくなる持続可能なまちを、多様な主体の協働により築いていきます。建物の不燃化促進、多様なニーズに応じた魅力ある公園の整備、地域感染症対策ネットワークの構築、脱炭素社会の実現に向けた総合的な取組みなどにより、持続可能な安全・安心の魅力ある都市を目指します。

⑸ 「対話・参加・協働に基づく区政運営」

政策の企画立案、検討、実施、評価及び見直しにおいて、区民に対する情報発信を適時適切に行い、区政への関心を高め、参加を促していきます。区民と区、区民同士の対話の場にも参加しやすいようさまざまな対話の機会を設けるほか、地域の課題解決にあたっては、区民と区がともに知恵を出し合い、それぞれの役割に応じて協力して取り組んでいく協働や協創を推進します。

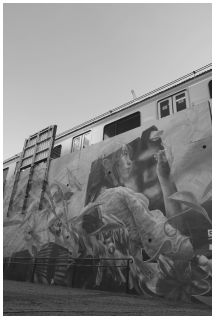
全国各地で大きな被害をもたらす自然災害の発生、新型コロナウイルス感染症の感染拡大、デジタル技術の急速な進展、ＳＤＧｓ（持続可能な開発目標）の取組みの広がりなど、社会状況は大きく変化しており、人々のニーズや価値観もさらに多様化しています。

今後は、行政の限られた資源だけでなく、地域や事業者等との対話を進めながら、協働・協創による取組みを推進していきます。

安全・安心な地域社会を築くとともに、中野の持つ多様な資産を次世代に引継ぎ、さらに発展させていくために、基本構想に描く10年後に目指すまちの将来像「つながる　はじまる　なかの」の実現に向けて、区政運営を着実に進めてまいります。

商業住宅複合施設として昭和41（1966）年に開業した中野ブロードウェイ。サブカルチャーの聖地として、個性的な店が集積する。

中野の秋の風物詩、「なかの東北応援まつり」。東日本大震災で被災された地域への継続的な支援を行うため、毎年開催している。東北各県の物産販売や伝統芸能等が堪能できる。大迫力の「ねぶた」は必見。また、茨城県常陸太田市、千葉県館山市、福島県喜多方市、山梨県甲州市、群馬県みなかみ町とは「なかの里・まち連携自治体」として、体験・観光交流、暮らしを結ぶ経済交流、自然を守る環境交流を進めているほか、「特別区全国連携プロジェクト」の一環として、北海道当別町・新篠津村とも交流を行っている。


中野区は新たな基本計画である「遊び心あふれる文化芸術のまち全体への展開」の一環として、民間事業者などと連携した壁画制作事業「中野ミューラルプロジェクト」に取組んでいます。写真はアーティストユニット「ＷＨＯＬＥ９（ホールナイン）」による、中野駅前北口広場の巨大壁画。